

Curriculum-Design and Evaluation of Social Study Instruction (Unit: Traditional Industry in Japan) (2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/24868

日本の工業における「伝統工業」の カリキュラム構成と評価（その2）

矢ヶ崎 孝雄* 金沢大学教育学部教育工学センター
社会科教育研究グループ**

目 次

- | | |
|---|---|
| <p>1 研究のねらい</p> <p>(1) カリキュラムの評価（現状と試み）</p> <p>(2) 評価の観点</p> <p>(3) 目標の修正</p> <p>2 研究の方法と手順</p> <p>(1) 評価問題とその意図</p> <p>① 知識・理解面の評価</p> <p>② 態度・能力面の評価</p> <p>③ 情意面の評価</p> <p>(2) 比較検討のための授業過程</p> <p>① 九谷焼中心と輪島塗中心の授業を比較して</p> <p>② 九谷焼中心の学習展開（A型）</p> <p>③ 輪島塗中心の学習展開（B型）</p> <p>④ A・B両型学習を終えて</p> <p>⑤ 輪島塗のみの学習展開（C型）</p> <p>3 評価結果と考察</p> | <p>(1) 知識・理解</p> <p>① データ処理の方法</p> <p>② 結果と考察</p> <p>(2) 態度・能力</p> <p>① 県内の伝統工業名とその位置</p> <p>② 伝統工業を調べたい観点を調査</p> <p>③ 伝統工業の将来についての評価結果</p> <p>④ 態度・能力面の評価からみた考察</p> <p>(3) 情 意</p> <p>① 輪島塗・九谷焼に対する事前の意識</p> <p>② 輪島塗・九谷焼に対する事後の意識</p> <p>③ 事前と事後の情意面の比較</p> <p>イ 輪島塗</p> <p>ロ 九谷焼</p> <p>(4) 考 察</p> <p>4 まとめと今後の課題</p> |
|---|---|

1 研究のねらい

昨年につづいてわれわれは、「日本の工業における伝統工業のカリキュラム構成と評価」の研究に取り組んできた。昨年度の研究内容を要約すると、伝統工業の定義づけ、単元11時間の

基本計画案、児童の事前意識調査とその傾向性などにつき研究し、A・B・Cの3型からなる伝統工業の展開案とその実践記録とをまとめたことにある。本年度はこれを受けて、実践後の評価とその考察及びカリキュラム再構成に取り組むことであった。

* 矢ヶ崎孝雄 金沢大学教育学部
** 金沢大学教育学部教育工学センター
社会科教育研究グループ
浅田 隆 金沢市立馬場小学校
岩田 修一 金沢市立諸江町小学校
大西 賢一 金沢市立緑小学校
岡部 昌樹 金沢市立長田町小学校
小幡 秀治 金沢大学教育学部附属小学校

新保 賢了 金沢市立駒婦小学校
砂田 武嗣 金沢市立浅野町小学校
端保源太郎 金沢大学教育学部附属小学校
野田 大介 金沢市立野町小学校
福原 俊夫 金沢市立大徳小学校
細川 紀彦 石川県教育委員会
村本外志雄 金沢市教育委員会
屋敷 道明 金沢大学教育学部附属小学校

(1) カリキュラムの評価（現状と試み）

カリキュラム（単元構成）の適否は、従来授業設計の段階で検討されてきた。また授業実施後においても、漠然とその成否が語られるのが普通であった。ところで授業の評価はこれまでカリキュラム構成の長いサイクルの中から、1時限を抽出、授業研究と称して実践し、いろいろな角度から分析するのが常道である。したがってカリキュラムそのものを評価するといった例は、前報でも述べたように これまでほとんどなかったといってよいであろう。

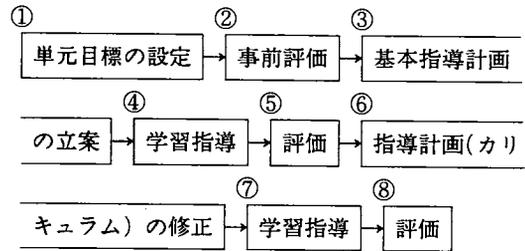
単元という長いサイクルの構成においては、教材の内容やその配列に加え、資料や教授手法の選択、学習者の地域性等が現実には複雑からんでくる。そうした事情とあわせてカリキュラムそのものを評価することは大変困難なものとなる。

このような現実をふまえてわれわれは「伝統工業」のカリキュラム構成を実施した。そしてここに指導案およびカリキュラムがある程度一般化され、普遍化されて使用されうるものであるかどうか、それは単に授業者の主観や学習後の児童のノート 1回のペーパーテストなどによって漠然と評価するのでなく、客観的に評価されたものでなくてはならないと考えるものである。かような前提のもとに、このカリキュラム構成の評価に挑んだ。そして、われわれは評価を客観的ならしめるため、知識・理解面からだけではなく、態度、能力面、さらに児童の情意の面からもその評価を試みたのである。このことが本年度研究のねらいである。

(2) 評価の観点

通常教育の場で評価を考える時は、それは児童の能力・成績・性格・効果などを観察、測定して、これを評定することを意味している⁽²⁾。ここでわれわれが意図したものは、もっと広く教育活動全体を対象としたものとする。これを図示すると次のようになる。

このうち、われわれは前年度の研究(その1)で①から④まで実施したので、本年度は⑤から



⑧までを研究の対象とした。

(3) 目標の修正

昨年度、われわれは伝統工業の単元の目標を次のように設定した。

- ・「伝統的な技術を生かした工業であり、人々が原料、土地条件を生かして生産していることを理解させる」
- ・「生産の工夫や技術の保存を図るための努力が行われていることを理解させる」

しかし、その後、教材の研究を深め、授業を展開するにつれて、次の点も重視しなければならないことに気づき、目標に追加した。すなわち、一つは大量生産との比較であり、今一つは風土に生きる伝統工業を強く意識して理解させることの2点である。

このように修正したのは、指導要領がどうして今、この時点で従来あまり世間から重視されているとは思われない伝統工業を持ち出して来たのかを検討した結果による。思うに、従来の学習においては近代工業のはなばなしの面を学習し、日本の近代化や経済的發展を謳歌してきた。その反作用として公害が問題となり、伝統的生産技術保持者が減少し、後継者にかげりが見えてきた。近代的花形産業にも陰影が潜んでくる。このような社会情勢を背景に伝統工業が登場してきたと考えたからである。

2 研究方法と手順

(1) 評価問題とその意図

① 知識・理解面の評価

知識・理解面の評価では、単元の要素概念を洗い出し、下記のような問題を作成した。事前と事後にこの調査を行い、各要素概念の把握が

どう変容したかを調べることにした。これは、事前と事後の変容の様子を比較し、カリキュラムがどういう要素面で有効かを明らかにするためである。

表1

- ◎ 下のABCのことがらと関係があると思う右のことに○、関係がないと思うことに×、どちらともいえないと思うことに△を()の中に入れて書き入れましょう。
- ◎ ○をつけた中で、左のことがらと結びつきが強いと思うものから順番に1, 2, 3...と番号をつけなさい。
- ◎ 先生の指示にしたがって書きましょう。

- A. 伝統工業でつくられる製品が大切にされているのは、
- () 昔から伝えられた技術により作られるから。
 - () 毎日の生活で使いやすいから。
 - () 石川県でしか作られないから。
 - () 職人が満足できるまで作りなすから。
 - () 製品一つ一つの形や色がちがうから。
 - () 見て美しいから。
 - () 伝統工業をさかんにするためにだから。
- B. 伝統工業が昔から今まで続いているのは
- () 冬は外での仕事ができなかったから。
 - () 原料が近くでとれるから。
 - () 外国への輸出が多いから。
 - () 技術が親から子、子から孫へと伝えられたから。
 - () 交通の便がよかったから。
 - () かんたんに技術が身につくから。
 - () 昔から行商をして製品を売ってきたから。
- C. 伝統工業にみられる特徴は
- () 消費地の近くで発達した。
 - () 数人で仕事をしている。
 - () 外国から技術を取り入れる。
 - () 分業である。
 - () 職人の製品に対する満足感がある。
 - () 芸術品としてあつかわれることが多い。
 - () 大量生産である。

図1 石川県の伝統産業で知っているものの位置と名称を書きなさい。

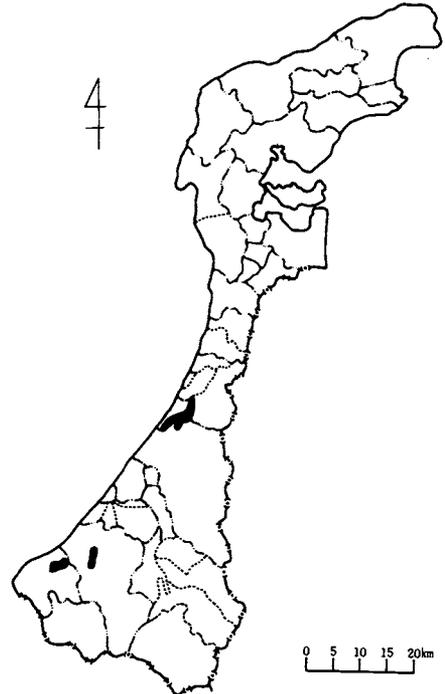


表2 (第一次の1時)
問1 この産業について、どんなことを調べたいですか。下の□に書いて下さい。

表3 (第二次の5時)
問2 この産業の生産は、今後どうなっていくと思いますか。また、そのわけも下の□に書いて下さい。

② 態度・能力面の評価

態度・能力面の評価では、受け身でなく積極的に学習に取り組む姿勢、および身についた知識を発展的に活用していく力を重視し、評価の対象とした。態度・能力は螺旋的に積み重ねられていく面が強く、単元固有の態度・能力は見つけにくい。そこをあえて、「伝統工業」の単元を通じて養う力として、積極的姿勢と発展的活用力をかかってみた。

③ 情意面の評価

情意面の評価では、児童の「伝統工業」に対するイメージが、授業によってどう変化するかを調べ、カリキュラムの妥当性に迫ろうと考えた。従来カリキュラムが妥当かどうかは、どう学習内容を理解させ、どんな能力を育てるかで語られてきた。しかし、そこで学んだ児童が、どのような心情のゆさぶりをとおして知識や能力を身につけたかも、カリキュラム評価として大切だと考えた。

そこで、ここではSD法を用いた。相反する感情用語を左右に置き、個人および学級全体の感情を定量的に分析しようと試みた。事前、事中、事後にこの評価を行い、児童の心情がどのようにゆれ動くかを見ようとしたのである。従来この方法は、歴史学習の人物や時代について用いられてきたが、地理的分野でも有効だと考えた。ただし用語には、感情用語でないものも含まれている。

(2) 比較検討のための授業過程

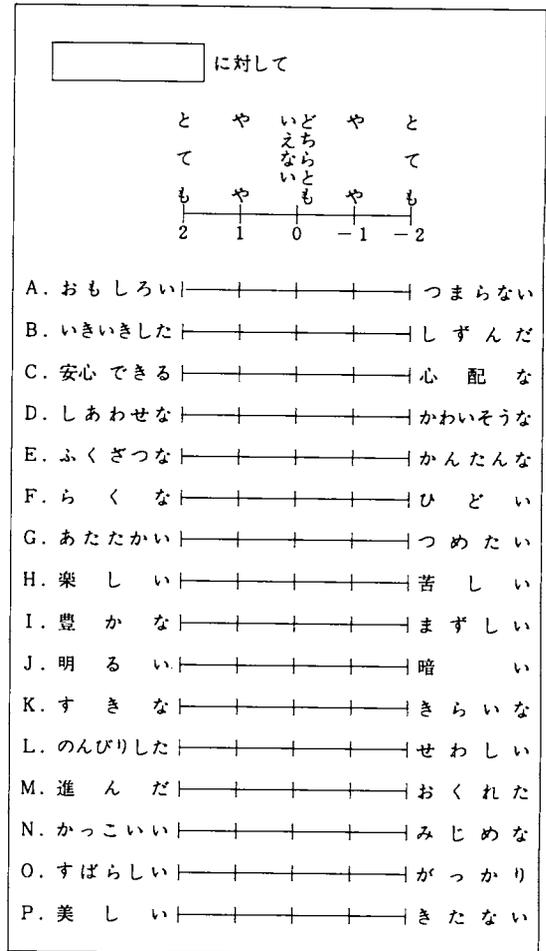
① 九谷焼中心と輪島塗中心の授業を比較して

石川県は伝統工業に富む地域であるが、金沢市の児童を対象にして伝統工業の学習を展開する場合、教材として活用できるものとしては、次のような伝統工業が考えられるであろう。

輪島塗・田鶴浜建具・加賀友禅・金沢箔・九谷焼・山中漆器

これらの中で、われわれは九谷焼と輪島塗とを教材として取り上げた。そのわけは次の諸点にある。すなわち両者ともに、製品が児童の身

表4



_____には九谷焼または輪島塗と記入する。

近に存在し、つねにふれることができる。また、九谷焼は金沢市にも工場があり、見学が可能である。輪島塗は、輪島市における朝市、千枚田波の花、くれない丸などとともに、その風土に対する児童の興味関心が強いものである。

学習展開のうえで九谷焼中心のA型と輪島塗中心のB型の授業型を設けた。なお、この2つの型については、次のような配慮をした。

- ・ A型は工場見学や取材活動を中心にすえた。対象として、野町校下の利岡光仙工場を利用した。

- ・ B型は資料収集の活動を中心にすえた。活用した資料は、輪島塗漆器組合資料、『子ども石川県史美術工芸品編』、『石川の地理』、『わたしたちの石川』、百科事典などである。
- ・ B型では、単なる輪島塗漆器に関する資料の収集という観点だけではなく、輪島市の風土にまで接点を見い出せる資料の収集をも意図した。
- ・ A型・B型のいずれも、児童が家庭から持ち寄れる日用品から、写真集や美術館で見られる美術工芸品に至るまで、児童が身近に接する場を設けるよう配慮した。
- ・ 両者ともに映画を活用することにより、それぞれの工業のイメージを高めたり、資料や工場見学においては得られない細部のようすにも、眼が向けられるようにした。
- ・ 伝統工業の特色をうきぼりにするため、近代工業との比較を取り入れた展開を両者ともに行った。

② 九谷焼中心の学習展開 (A型)

金沢市立野町小学校

目標

- ・ 伝統的な技術を生かした工業があり、人々が原料、土地条件を生かして生産していることを理解させる。
- ・ 生産の工夫や技術の保存を図るための努力が行われていることを理解させる。

学習計画 総時数11時限

- 第1次 オリエンテーション……………2時限
- 第2次 九谷焼……………6時限と課外
- 第3次 輪島塗……………2時限
- 第4次 まとめ……………1時限

第1次 オリエンテーション (2時限)

〈伝統工業の製品にはどんなものがあるか〉
 ・石川県 輪島塗、九谷焼、金沢箔、山中塗。
 ・全国 焼き物、漆器、織物、和紙など

昔から伝えられてきた工業で、現在も生産され、美術的・工芸的な製品が多い。

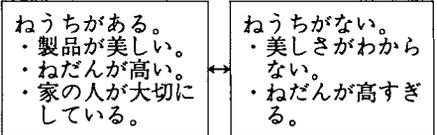
1
・
2

石川県の代表的な九谷焼と輪島塗を例に伝統工業について学習しよう。どんなことを学習したいか、問題をつくり、学習計画をたてよう。

1. 九谷焼はどういうねうちがあるのか。
2. 九谷焼はどのように伝わってきたのか。
3. 働いている人の気持ちは。
4. 九谷焼はどうして大量生産しないのか。
5. 九谷焼は今後どうなっていくのか。

第2次 九谷焼 (6時限と課外)

〈九谷焼はどういうねうちがあるのか。〉

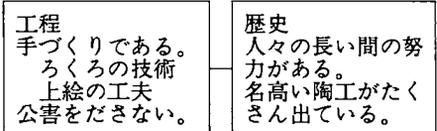


3

九谷焼はねうちがあるとされているが、製品からだけでは、ほんとうのねうちはつかめない。

〈九谷焼のねうちをつかむために、それがつくられる工程や歴史、働く人の気持ちについて調べよう。〉

〈映画、工場の取材、資料をもとに、九谷焼のねうちをさぐろう。〉



4

・

5

働く人
 真剣そのものである。
 心をこめている。
 つくるよろこびが感じられる。
 完成した時の満足感がある。

九谷焼は思っていた以上にねうちがあるが、今まで学習してきた近代工業とは、いろいろな面でちがいがみられる。

〈近代工業とくらべて、九谷焼には、どんなねうちがあるのだろうか。〉

- ・近代工業の方がねうちがある。
- ・九谷焼の方がねうちがある。
- ・同じくらいのねうちがある。
- ・各々、別々のねうちがある。

6

九谷焼は、長い間うけつがれてきた手づくりの技術という、近代工業にはみられない伝統工業特有のすばらしいねうちがあると見える。

	九谷焼はすばらしいねうちがあるが、問題点はないのだろうか。
7	<p>〈九谷焼にはどんな問題点があるのか。〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・若い人が後をついでくれない。 ・大量生産をしている。 <p>窯の変化, 自動ガス窯, 半自動成型機, ハン, 転写などの技術の工夫。</p> <p>〈九谷焼は大量生産をした方がよいのか, 〉 しない方がよいのか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大量生産したのでは, 伝統工業のねうちがなくなってしまう。 ・九谷焼を存続させるためにも, 大量生産しないではほしい。 ・たくさんの人を買ってもらうために, 大量生産をした方がよい。
8	<p>〈今後, 九谷焼はどうなっていくだろうか。〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・すばらしいねうちがある九谷焼は, 今後も続いていくだろう。 ・大量生産していたらつぶれてしまう。 ・長い歴史をもつ九谷焼はいつまでもすばらしい製品をつくってほしい。
第3次 輪島塗 (2時限)	
9 10	<p>〈輪島塗は九谷焼とどんなところがいてい るだろう。〉</p> <p>輪島塗も九谷焼と同じように, 伝統工業としてのねうちや問題点を持っている。</p>
第4次 まとめ (1時限)	
11	〈伝統工業を近代工業と比べてまとめよう。〉 略

③ 輪島塗中心の学習展開 (B型)

金沢市立馬場小学校

学習計画	総時数11時限
学1次	オリエンテーション……………1時限
第2次	輪島塗……………7時限と課外
第3次	九谷焼……………2時限と課外
第4次	まとめ(伝統工業の特色)……1時限

第1次 オリエンテーション (1時限)	
	<p>〈伝統工業の製品にはどんなものがあるか。〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・石川県 輪島塗・九谷焼・金沢箔・山中塗 ・全国 焼き物・漆器・織物・和紙など <p>昔から伝えられてきた工業で, 現在も生産され, 美術的・工芸的な製品が多い。</p>

1	<p>石川県の代表的な輪島塗と九谷焼を例に, 伝統工業について学習しよう。どんなことを学習したいか, 問題をつくり, 学習計画をたてよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・製品の種類と生産地はどうか。 ・いつごろ, だれが, どこで始めたのか。 ・どのようにして作られるか。工場と生産。 ・生産額, 送り先はどうか。 ・成りたつ条件, なぜその地域でさかえたか。 ・問題点はないか。 ・近代工業と比べてその特色はどうか。
第2次 輪島塗 (7時限と課外)	
2 3	〈学習問題を解決しよう。そのための資料集めをグループで協力しよう。〉
4 5	<p>輪島塗の製品にはどんなものがあり, どのようにして作られるか, おわんを例にしらべよう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おわん, はし, お盆, 額, 机, ついたて ・映画「輪島塗」 原料・材料, 工程——おわん作り <p>仕事が分業化され, 多くの工程を経て, 製品をじょうぶで美しいものにあげる。</p>
6	<p>〈輪島塗はいつごろ, だれが始めたのだろうか。また, 現在どれくらいの生産額で, どんな人たちが支えているのだろうか。〉</p> <p>およそ 600年前, 技術が伝えられ, 江戸時代には藩の保護により盛んになった。</p> <p>生産が伸び輸出も多い。輪島塗の生産を支えているのは年寄りや婦人が多い。</p>
7	<p>〈輪島に漆器づくりが昔からさかえてきたのはどうしてだろう。〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・成立条件 <ul style="list-style-type: none"> 地形 (中国大陸との交流・辺境の地・海岸べり) 気候 (高温多湿・快晴が1年に30日・雪国) 風土・産業 (産業が少ない・農業規模が小さい) 原料・材料 (档・樺) 朴などの原木, 能登漆・地の粉) 市場 (行商により全国的に・注文生産) 技術 (地の粉の使用で丈夫・沈金術の創始や蒔絵技術の伝来により美しい) 労働力 (周辺農漁家の2男3男などたえず働き手あり・徒弟制による技術者養成・朝市圏) 頼母子 (椀講・塗師屋による注文販売) 輸送 (行商・大量注文には和船) ・存続条件 <ul style="list-style-type: none"> 生産 (徒弟制の確立による技術伝承・工業品化・分業による能率化・中国塗の輸入・後継者養成) 消費 (戦前は農村地主層や旅館へ・戦後は観光土産としてデパートなどへ) <p>原料と材料・自然 (地形・気候)・技術努力やくふうなど。</p>

	<p>じょうぶで美しい輪島塗の漆器づくりが今日までさかえてきた。</p>		
8	<p>輪島塗の伝統工業に問題点はないのだろうか。また、ますますさかんにするためにどんな努力をしているのだろうか。</p> <p>・問題点 うるしの生産が能登で行われていない。 年寄りや婦人が多い。 職種による後継者のかたより。</p> <p>・努力 昭48 輪島市役所漆器課 漆の植林 原材料の共同購入 漆器組合と労働条件改善</p>		
第3次 九谷焼(2時限と課外)			
9・10	<p>〈九谷焼についても調べてみよう〉 グループで協力して資料を集める。 ひとり学習, グループ学習 〈製品, 生産工程, いつごろ・だれが, 生産, 問題点などをまとめよう。〉</p> <table border="1"> <tr> <td>手づくり 高価 美術品</td> <td>機械化 大量生産 日用品 需要が大きい</td> </tr> </table> <p>生産のしかたに2つの方向がある。 絵付が特色 なやみ, 問題点</p>	手づくり 高価 美術品	機械化 大量生産 日用品 需要が大きい
手づくり 高価 美術品	機械化 大量生産 日用品 需要が大きい		
第4次 まとめ(伝統工業の特色)(1時限)			
11	<p>〈近代工業と比べて伝統工業の良い点はどんなことだろう。また, 伝統工業にはどんな問題点があったかまとめよう。(略)〉 〈これからの伝統工業ではどんなことに気をつけたらよいのだろう。〉</p> <p>後継者を育てる。技術をより良くするくふうや努力を重ね手作りの良さを生かす。</p>		

④ A・B両型学習を終えて

学習を展開した結果, A型, B型それぞれの長所や短所が明らかになってきた。その主な点はずぎのようである。

- ・ A型においては工場見学が効果的であり, ろくろ回しや絵付けに対する興味関心が強く, 伝統工業の特色の1つである手づくりの良さに共感する児童が多くみられた。
- ・ B型では, 資料収集を中心にすえ, グル-

ープ学習を採り入れたことで, 児童の学習意欲が増し, 輪島塗と輪島市の風土を結びつけてとらえる児童が多かった。

- ・ A型においては, 製品・工程・職人に対する興味関心は高まったが, 生産地が大聖寺・小松・寺井・金沢と散らばっているため, 風土との結びつきが弱く, 九谷焼生産の社会的背景にまで児童の眼を向けさせることが困難であった。
- ・ 輪島塗の場合は工場見学が不可能ではあるが, 資料を収集することにより, 製品・工程に対する認識は充分補うことが可能である。しかし, 職人の気質にまで児童の眼を向けさせることができたか疑問が残る。つまり, 輪島塗生産に対する実感がやや希薄に思えた。
- ・ 両者ともに, 製品にふれ, その価値について話し合わせたり, 映画を活用しイメージを高めさせたりしたことは, 学習に変化を与え, 児童の伝統工業に対する認識を深めさらに, 心情をゆきぶるうえで効果がみられた。
- ・ 伝統工業と近代工業とを比較させたことにより, 伝統工業の特色である手づくりの良さ, 風土との結びつき, 働きの喜びや満足感, 製品の価値を引き出すことができた。

以上, A型・B型の学習展開には, それぞれ長所や短所がみられたが, 両者ともに石川県の伝統産業を代表するものであり, 教材としての価値は十分に認められた。このような学習を進めることで, 郷土への愛着や伝統工業のすばらしさを児童にわからせることができたように思える。なお, これらのことは, あえて両者ともに教材として扱わなくとも, どちらか一方を学習することにより, 十分に身につくと思われた点を最後に強調しておきたい。

⑤ 輪島塗のみの学習展開(C型)

先の例(輪島塗と九谷焼を組み合わせたもの)のA型やB型とは別に, ここでは, 輪島塗のみを具体例として取り上げ, 一般化を試み目標達

成をめざした。それは、ごく限られた輪島という特定の地域を中心にさかんな工業であること、土地の人々が漆器業ができるように、原材料や土地条件、風土を生かしてきたことが比較的とらえ易いこと、輪島塗独得の技術が製品からある程度発見できることなど、学習に具体性を持たせそうなことにある。

単一事例という不安な一面もあるが、学習に具体性と深まりが出れば、そのことが解消されるのではないかと考えている。以下に実践例を載せ考察を記してみたい。

実施校 金沢大学教育学部附属小学校
第1次 オリエンテーション (2時限)

時	学習の過程	資料
1	<p>〈古くからの工業製品にはどんなものがあるだろうか。〉 九谷焼 有田焼 瀬戸焼 西陣織 博多織 能登上布 輪島塗 山中塗 会津塗…… ・伝統工業分布図づくりをする と全国にちらばっている。 ・製品には地名のつくものが多い、その土地と関係深かそうだ。 石川県では輪島塗と九谷焼がとくに有名である。</p>	<p>実物(皿, 椀, 茶わん, 花びん……) 資料集 (5年用)</p>
2	<p>〈学習問題をつくり、調べる。〉 計画をたてよう。 輪島市における漆器製造業の位置をとらえる。 ・事業所数は全体の40%位 ・はたらく人数は全体の約1/3 ・漆器関係の仕事をしている家が市街地全体に分布する。 問題づくりをしグループ調べの計画をたてる。</p>	<p>・市の事業所と働く人数(グラフ) ・漆器関係の家の分布図</p>

第2次 輪島塗 (8時限)

時	学習の過程	資料
3 ・ 4	<p>グループ学習 どのように作り、何か工夫しているか。 なぜ輪島におこり発達したか。 さかんにするために何か工夫しているのか。 困るようなことがないのか。</p>	<p>「子ども石川県史」など (課外見学) ・販売店 ・物産館</p>

5	<p>〈有名なわけを探ろう。〉 ・生産工程や生産の工夫 ・技術保存のようす ・製品のちがい 〔現在……椀・箸・盆・額・机・ついたてなど 江戸時代……家具・仏具など大きい物〕</p>	<p>映画「輪島塗」</p>
6	<p>〈どうしてすばらしい椀がでるのだろうか。〉 原材料 作る工程や職人 原木の産地 長い月日に多くの工程と人手を塗り研ぎの繰返 ・布着 地 塗り研ぎの繰返 ・本漆 地 技術を高め伝える(苦労と根気) ・ごくそ 地の粉 じょうぶで美しいお椀</p>	<p>「製作工程型」 ・職人の話(録音)</p>
7	<p>〈いつ頃おこって、さかんになったのだろうか。〉 ・14世紀の終わり頃始まった。 ・紀州から高度な塗り方が伝わった。 ・江戸時代に加賀藩が保護し一層さかんにした(技術を高める)。 ・今は生産が伸び輸出も多い。(販路の拡大・注文生産体制 家内工業的…多い老人)</p>	<p>「輪島塗年表」 ・生産額の推移(グラフ) ・業種別事業所数及従業者数</p>
8	<p>〈輪島塗がここにさかんになってきたのはどうしてか。〉 地形・気候 原材料 ・多湿 原木の生産 ・家内労働(冬) 地の粉発見 ・よい産業に 本漆を使う。 恵まれない。 人々の努力 ・良い職人を育てる・技術(高め伝える)・藩の保護政策 ・行商による販路拡大(信用)</p>	<p>・理科年表 ・アテ分布図 ・スライド(漆, 地の粉, 行商作業場…)</p>
9	<p>〈これからもさかんになっていくだろうか。〉 技術後継者の減少……老人, 婦人の比重が高くなる。 原材料不足……漆の輸入や移入価格の高騰……手作りの工程, 量産できない。 伝統工業の存続にかかわるような問題をかかえているが, 対策として, ・輪島漆芸技術研修所の設置 ・漆の苗木植林(二次の計画) ・市に漆器課設置 講習会 ・漆器組合の活動 労働条件の改善</p>	<p>・輪島塗を受け継ぐ人 ・漆の入手先 「輪島市勢要覧」 ・毎日グラフ(漆特集号)</p>

・展示即売会を開く
組合だけでなく、市や国でも力を入れている。

第3次(1時限)

時	学 習 の 過 程	資 料
11	<p>〈近代工業とくらべてどんな〉 ちがいがあろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高度な技術を持った職人の分業による。 ・小さな家内工場が多い。 ・量産できないが手づくりの良さを持っている。 ・古い伝統を伝え高めてきている。 ・社会の変化に対応していく点で問題も多い。 <p>これからの伝統工業はどうあるべきだろうか。</p>	

学習を終わって

69名の児童から得たアンケート結果よりいくつかあげると次の通りである。

	ととも	やや	ふつう	否定的 反応
全体にむずかしかった	13%	29	54	4
たのしい学習であった	57%	26	13	4
まだ調べたい事がある	20%	32	28	20
製品への気持ちがかわった	59%	29	7	5

・児童の感想(一部抜すいた)

E男

できれば輪島塗を作っているところを見て勉強してみたかったです。もう少し時間があれば作っている人の楽しいこと、苦しいこと、もうけなども調べたいです。……

Y男

一人やグループなどで調べる時間が少なく、

思う存分調べられませんでした。調べる時間をもっとふやしてほしいです。……

I子

伝統工芸は、昔からの技術、風格が刻まれているからとても大切なんだなあと思いました。ふしぎに思った事は、よくあんな細かい仕事をやる気になる人がいるものだという事です。……

3 評価結果と考察

以上の3つの授業を通して、伝統工業のカリキュラム評価を行った。評価方法はいろいろあると思われるが、少なくとも、知識・理解面、態度・能力面・情意面の3面からアプローチしていくのが、授業研究(カリキュラム評価も含む)の現状といえよう。⁽³⁾

以下、知識・理解、態度・能力、情意の各面からの評価について記していく。

(1) 知識・知解

前掲2 (1)のうち知識・理解に関する評価の結果を示しているのが図表1である。⁽⁴⁾まずデータ処理の方法について触れ、次に結果について考察してみよう。

① データ処理の方法

図表中Iの事前、事後テストで、各要素概念に○をつけた回答結果の処理方法を、野町小学校を例にとって以下に示そう。

Aと1番結びつきが強いものとして a_1 を選んだ児童が事前では32名、事後では27名いた。またAと a_1 の結びつきが2番目に強いと考えた児童が事前では4名、事後では7名いたことを表している。

以上のようにして出された結果を加重平均したのが図表中のII、IIIである。⁽⁵⁾ a_1 については事前では86.7%、事後では80.8%を示している。また、マイナスの要素概念については、算出された値に-1をかけて示すことにした。このようにして算出された数値を段階別に表示したのが表中のIIIである。

② 結果と考察

前章で言及されているねらいに即して若干の

考察を試みてゆきたい。まず、かなりの児童が事前に知っている要素概念は a_1 , b_4 , c_6 の3つといえよう。これらの諸概念は事後でも高い定着度を示している。

学習後、授業目標とする要素概念間の接続が定着したと考えられるものとして、 a_4 , a_6 , b_2 , c_5 が挙げられる。

以上の結果から、本研究に用いたカリキュラムで児童に効果的に把握させることができたと考えられる要素概念として、 a_1 , a_4 , a_6 , b_2 , b_4 , c_5 , c_6 を挙げることができよう。すなわち伝統工業の製品の価値や意味(A)と歴史(a_1)職人の心(a_4)そして、製品の持つ美しさ(a_6)とを接続させて児童は把握したわけである。

また、伝統工業の存続条件(B)を、原料面(b_2)や技術の保存、伝達といった技術面(b_4)のフィルターを通して考えることが定着したとみられる。

さらには、近代工業と比較したうえで、伝統工業の特色を製品に対する職人の満足感(c_5)や、製品の芸術品としての価値(c_6)と結びつけて把握しているといえよう。

ところで、効果的に定着したと思われる要素概念をよく見ると不思議な現象に気付く。すなわち、野町小、馬場小に見られる b_4 、馬場小、付属小に見られる c_6 がそれである。これらは事前、事後とも把握されている割合が高い要素概念であるが、事後のほうが把握されている割合が低くなっている。これらの現象については以下のようなことが考えられる。

児童は事前では観念的に要素概念間を接続させている。それが学習することにより、諸要素概念を有機的に結びつけるようになり、そのためにある特定の要素概念の把握の割合が低くなったと推察される。例えばBの項目については事前では3校とも b_4 を1つだけ選んでいる児童がかなりいた。ところが事後になると、 b_2 や b_7 の要素概念を絡めて考えるようになり、事前のように観念的に b_4 が1番結びつきが強いと考える児童が減ったわけである。学習成果の1つが

このような現象となったと解釈するのはいかなるものであろうか。

以上述べてきたこととは逆に、要素概念間の接続があまり効果的に定着しなかったものに b_1 , b_7 がある。つまり、伝統工業の存続条件の中で気候・風土面、販売面の定着が弱いことを示している。

では、伝統工業を学習していくうえでマイナスの要素となる概念は何であろうか。この調査では a_3 , c_1 , c_4 の3つの要素が挙げられる。

さて、効果的に把握された要素、概念、あまり効果的ではなかったもの、そしてマイナス要素となるものについて極めて簡単に調べてきた。最後に、これらの諸概念の定着の要因を素材の面と手法の面から考えてみたい。

a_6 , c_6 は九谷焼のほうが定着度が高い。つまり、芸術品としての定着度は九谷焼のほうが高いことになる。これは九谷のもつ美しさのほうで児童には理解されやすく、そのため、九谷焼＝美しい＝芸術品、という構図が描かれやすいのではないと思われる。また、存続条件と原料の結びつきについても九谷のほうが定着しやすいようである。逆に b_4 の技術伝達、技術保存 b_7 の行商に関しては、輪島塗のほうが高い定着度を示している。

定着度のちがいの要因が素材にあると考えられるものがプラス要素に多い反面、マイナス要素は手法による要因が大きいようである。 a_3 はすべての伝統工業が石川県で行われているわけではないから、マイナス要素といえる。しかし、九谷焼、輪島塗にかなりの時間をかけて学習した児童は、伝統工業＝九谷焼(あるいは輪島塗)＝石川県で、行われている、といった把握をしたようである。ただ付属小学校では、本単元の初めの時間に全国の伝統産業について調べさせたので、事後では誤答が全くないという手法上の結果が表われたわけである。

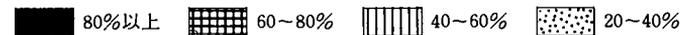
c_4 の分業については、近代工業にも伝統工業にもいえることである。3校中、野町小学校は近代工業を学習してから伝統工業に入っている。

それに対し、馬場、付属の両校は伝統工業からはいったわけである。調査結果は、伝統工業の特徴は近代工業との比較により明らかになると

いうことを示している。それゆえ、このc₄の各校における違いも、やはり授業の手法によるところが大きいといえるのではないかと思われる。

図表1 知識についての評価結果

データ処理の方法 テスト項目(要素概念)		学 校												III 加重平均(段階別表示)							
		I 事前テスト,事後テストで各要素概念に○をつけた人数(人)												II 加重平均(%)							
		野			町			馬 場			付 属			野町	馬場	付属	野 町 (九谷)	馬 場 (輪島)	付 属 (輪島)	平均	
A. 伝統工業で作られる製品が大切にされているのは	a ₁	昔から伝えられた技術により作られるから	32	4	0	20	9	1	27	3	2	86.7	72.1	82.4							
	a ₂	毎日の生活で使いやすいから	0	2	0	0	0	0	0	0	1	-3.3	0.0	-0.9							
	a ₃	石川県でしか作れないから	1	7	3	5	3	4	1	7	0	-16.7	-22.5	-15.7							
	a ₄	職人が満足できるまで作りなおすから	2	3	8	1	6	2	1	5	0	16.7	15.3	12.0							
	a ₅	製品一つ一つの色や形がちがうから	0	4	4	0	1	5	2	3	4	10.0	7.2	14.8							
	a ₆	見て美しいから	3	6	4	3	5	6	4	7	7	20.8	19.8	27.8							
	a ₇	伝統工業をさかんにするためだから	1	2	0	4	6	2	0	10	5	-5.8	-23.4	-3.1							
			0	1	0	2	2	1	1	4	0	-1.7	-9.9	-10.2							
B. 伝統工業が昔から今まで続いているのは	b ₁	冬は外での仕事ができなかったから	0	0	0	2	0	3	0	2	2	0.0	8.1	5.6							
	b ₂	原料が近くでとれるから	5	7	0	2	5	3	3	4	1	24.2	17.1	16.7							
	b ₃	外国への輸出が多いから	0	1	1	1	4	1	1	1	0	-2.5	-10.8	-4.6							
	b ₄	技術が親から子, 子から孫へと伝えられたから	31	1	0	28	2	0	23	8	0	79.2	79.3	78.7							
	b ₅	交通の便がよくなったから	17	7	0	19	4	4	30	6	0	54.7	62.2	94.4							
	b ₆	かんたんに技術が身につくから	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0.0	-1.8	0.0							
	b ₇	昔から行商をして製品を売ってきたから	1	8	3	0	8	4	7	10	2	18.3	18.0	39.8							
		1	1	3	2	3	10	0	11	7	6.7	19.8	26.9								
C. 伝統工業にみられる特徴は	c ₁	消費地の近くで発達した	1	3	2	0	0	1	2	1	4	-9.2	-0.9	-11.1							
	c ₂	数人で仕事をしている	0	1	1	3	2	2	4	0	1	-4.5	-13.5	-12.0							
	c ₃	外国から技術をとり入れる	2	10	9	3	11	7	1	6	10	29.2	34.2	23.1							
	c ₄	分業である	6	6	14	4	7	5	1	8	8	36.7	27.9	25.0							
	c ₅	職人の製品に対する満足感がある	0	1	0	0	0	1	0	1	1	-1.7	-0.9	-2.8							
	c ₆	芸術品としてあつかわれることが多い	0	1	0	2	0	2	0	0	1	-1.7	-7.2	-0.9							
	c ₇	大量生産である	0	4	8	2	2	9	9	3	3	-13.3	-17.1	-33.3							
		1	1	1	2	11	7	11	8	8	-5.0	-31.5	-52.8								
		12	3	3	10	10	5	2	11	6	37.5	49.5	31.9								
		13	13	4	16	9	3	9	12	4	57.5	62.2	50.9								
		21	9	1	17	7	3	19	13	2	68.3	61.3	78.7								
		18	12	5	10	7	8	11	10	7	69.2	46.8	55.6								
		0	0	0	0	2	0	1	0	0	0.0	-3.6	-2.8								
		0	1	1	0	1	1	0	0	0	-2.5	-2.7	0.0								



△-10~-20% ▲-20%をこえるもの

(2) 態度・能力

① 県内の伝統工業名とその位置

この調査〔前掲2(1)〕のうち態度・能力は県内の伝統工業についての既有的知識を知るために、石川県白地図に伝統工業の名称と所在位置とを記入回答させた。

表5 伝統工業の名称と位置の調査結果

伝統工業名	野町小		付属小	
	名称	位置	名称	位置
1 九谷焼	31	20	22	13
2 輪島塗	29	22	24	17
3 加賀友禅	13	8	22	17
4 山中塗	12	6	15	11
5 大樋焼	0	0	5	4
6 その他	1	1	14	5

野町小学校では九谷焼、輪島塗がよく知られ、付属小学校では、このほかに加賀友禅、山中塗についても高い結果が出ている。しかし、位置の記入になると両校とも回答は60～70%という数字を示す。

② 伝統工業を調べたい観点についての調査結果

表6の調査は九谷焼または輪島塗を学習するために、どんな観点から調べたいのかを児童に自由に記述回答させた結果である。なお、野町小学校は九谷焼について、馬場小学校と付属小学校は輪島塗について、それぞれ第一次の1時間後に記述させた。

表6 伝統工業を調べたい観点についての調査結果

調べたい観点	野町小	馬場小	付属小
	九谷焼	輪島塗	輪島塗
1 歴史	16	28	17
2 原料	4	15	5
3 製造工程	5	21	11
4 販売	3	18	12

5 技術伝達	3	5	3
6 生産額	0	11	26
7 手作業	3	11	6
8 製品の価値	9	17	8
9 職人の気持ち	18	5	4
10 従業員数		15	10
11 種類	3	9	3
12 問題点	4	4	3
13 他工業との比較	0	9	7
14 その他	7	18	21

その結果、3校の調査結果にかなりの違いが見られた。野町小では歴史についてと職人の気持ちについて調べたい児童が多かった。他の2校は比較的似た傾向を示し、歴史、製造工程、販売、生産額などが多かった。この理由として考えられるのは、素材の違いと既習経験の違いによるものと思われる。野町小学校では、過去の学習の中で、実際に九谷焼製造工場を見学しており、そこは学校からも近い。このようなことから、働く人間の側に関心が向いたものと考えられる。また、九谷焼の場合、その製造工程については、ほとんど調べようという児童がいないのに対し、輪島塗の2校はかなりの児童が記述している。これは、九谷焼を焼き物として図工科の学習の中で、ある程度理解していることや、実際に作っている場面を見ていることなどから容易に考えられることである。しかし、輪島塗の場合は、その工程の複雑さや実際に見ていないという理由から、製品をみでの疑問、すなわち、どのように作られたのだろうか、どれくらい作られるのだろうか、工場にはどれくらいの従業員がいるのだろうかというような疑問に発展していったものと考えられる。

これまで、素材や既習経験の違いによる結果の差異に目を向けて述べてきた。そこで九谷焼と輪島塗に共通なものをみると、3校ともに言えるのは、それらのできた歴史的なものである。

これは、伝統工業のもつ古いというイメージから当然であると考えられる。

③ 伝統工業の将来についての評価結果

九谷焼または輪島塗の学習が終了した時点で、それぞれの今後の展望について、児童各自の考えとその根拠とを自由に記述回答させた。

表7 伝統工業の将来の方向

方向の項目	九谷焼			輪島塗						合計
	野町小		計	馬場小		付属小		計		
	男	女		男	女	男	女			
発展	7	14	21人 (53%)	5	5	10人 (26%)	1	9	10人 (28%)	41人 (36%)
衰退	9	2	11 (27)	13	8	21 (55)	18	5	23 (64)	55 (48)
停滞	0	0	0 (0)	1	4	5 (13)	0	1	1 (3)	6 (5)
その他	6	2	8 (20)	2	0	2 (6)	1	1	2 (5)	12 (11)

表8 伝統工業の将来の方向についての根拠

根拠の観点	九谷焼		輪島塗				合計	
	野町小		馬場小		付属小		計	
	+	-	+	-	+	-	+	-
原料(うるしの不足)	0	1	2	9	0	19	2	29
後継者(人手不足)	0	6	0	13	0	10	0	29
高価格(需要)	0	4	0	4	0	11	0	16
手作業(他工業の比較)	8	1	0	7	0	14	8	22
近代工業の新製品	0	3	1	7	0	11	1	21
大量生産の技術	7	17	0	3	0	9	7	29
歴史(伝統)	7	0	2	0	6	0	15	0
芸術品としての価値	7	0	4	0	6	0	17	0
技術の伝達(無理)	2	1	2	6	0	4	4	11
その他	5	1	6	8	10	6	21	15

+…発展の要素、-…衰退の要素

表7の調査結果によると同じ伝統工業でありながら、その将来性について逆の見方がなされている。九谷焼を中心に学習した野町小学校では、より発展すると考える児童が半数余りを占めている。輪島塗学習の馬場小学校・付属小学校は、九谷焼の結果と反対に、振わないと考える児童がそれぞれ半数以上いる。また、男女のその見方も大きな特徴がみられる。発展と考

えている九谷焼の21名中14名が女子であるし、輪島塗の馬場小も10名中5名、付属小に至っては10名中9名が女子となっている。一方、男子は、3校ともそれぞれの将来性については否定的にとらえられており、女子と見方が反対になっている。

このように九谷焼と輪島塗との素材の違いにより、その見方が異なったことの要因を、表5や表8の結果から考えてみよう。野町小は、職人の内面的なもの(精神的なもの)に、馬場小付属小では、職人を取りまく状況(職人の生活、健康など)に目が向けられている。人間と労働との関係から考えた時、伝統工業は、労働からの疎外もなく、ものを創り出す楽しさをもった職業と考えられる。したがって、労働条件、原料条件、原料その他外縁の条件に目を向けた児童の方は、将来性なしという見方をせざるを得なくなると考えられる。つまり野町小の場合その製造工程を直接見ているので、見ていない馬場小・付属小より感情移入がしやすいと思う。また、女子は、美しく価値あるものは続くべきだし、続いて欲しいという願望が含まれていると思われる。

輪島塗を扱った馬場小と付属小とは、似た傾向でとらえているが、九谷焼の野町小とは差が大きい。輪島塗では、近代工業との比較で考えているため、原料、人手、公害などの条件から論理を組み立てている。そのため、手作りなどは衰退する要素としている。九谷焼の方は、発展すると反対にとらえている。これは、九谷焼の現状の中にすでに、機械による大量生産されている面があり、同じ九谷焼の中で比較したためと考えられる。

④ 態度・能力面の評価からみた考察

以上の3つの評価結果から、素材の本質的な違いと単元構成の違いにより、伝統工業に対するとらえ方に差が出ているといえる。

日本の近代工業における伝統工業を考えてみた時に、その生産のし方がいわゆる昔ながらの手作業によるものということが大きな特質の1

つとなる。したがって、機械による大量生産などの近代的な面と手作業による生産などの面という二面性を有する九谷焼は、輪島塗と比較すると教材としてはやや劣ると思われる。九谷焼の野町小の場合、製造工程を実際に見た経験から、職人の心や製品の価値については深く考えていたが、そのとらえ方が主観的になりすぎ、現状の問題点にまでは目が向いていなかった。

一方、輪島塗の両校とも、近代工業と対比しながら考えさせることにより、伝統工業のもつ古い体質をとらえていたように思われる。しかし、製品だけを見、間接的な資料からの学習展開であったため、伝統工業のもつ良さといった面については、十分につかむ所までは至っていない。最も、見学することは望ましいが、全て見学できるとはいえない。そこで、見学できないものをどう扱ったらそのねらいに迫らせることができるか、ということが今後の課題として残った。

(3) 情 意

① 輪島塗、九谷焼に対する事前の意識

前掲2(1)のうち情意のアンケートに対する児童の回答の共通した特質として、ほとんどの調査項目について児童は肯定的に反応し、中でも製品に対する価値を高く評価している(図2～6)。すなわち児童は、輪島塗、九谷焼を芸術品として扱えているといえる。

一方、労働やそれを含めた環境に対する回答は否定的である。それは、多くの労力、職人の苦勞、あるいは徒弟制度のような伝統産業が共有する暗っばさに起因しているのではないかとと思われる。これについては、4学年の社会科、「石川県の産業」で学習したイメージが、かなり定着しているともいえる。

しかし、回答のうち類似した感情の形態の中にも、輪島塗と九谷焼とではいくつかの相違点もみられる。九谷焼を輪島塗ほど「ひどい、ものとしてではなく、「楽しい、「明るい」といった肯定的な捉え方をしている面もみられる。ただし、それは素材とした伝統工業の本質に起

因するものなのか、あるいは地域差による児童の生活経験の相違からくるものなのか、また、学校における学習経験の相違にもとづくものなのかは明確ではない。

② 輪島塗、九谷焼に対する事後の感情

事後の感情は事前に抱いていた輪島塗、九谷焼に対する感情が、学習の中で素直に増幅され、さらに類似した肯定的な感情の形態となって回答に表れている。なかでも、職人が製品をつくる過程で喜びをみい出していることを学習し、回答では「おもしろい」、「あたたかい」、「楽しい」、「明るい」、「すきな」といった項目がより肯定的に捉えられ、興味・関心が高まったように看取される。しかし、労働条件、労働環境がおくれているというイメージは、近代産業との比較意識が先行し、事後においてもぬぐいきれなかった。

また、相違点をみると、輪島塗が九谷焼に対してよりも一段と感情が肯定的に増幅されていることから、輪島塗の素材の方が児童の気持ちを深くゆきぶつているといえる。

③ 事前と事後の情意面の比較

イ 輪島塗

馬場小と付属小の輪島塗に対する感情は、事前、事後ともに形態的に類似し、肯定的で、且つ、肯定的方向に増幅している。付属小は、興味・関心が非常に肯定的に増幅しているが、製品に対する価値の再認識が馬場小に比べて薄いのめだっている。この差異があらわれた原因を考察してみると、付属小は実物を取り入れた授業に比重をおき、馬場小は参考資料に中心をおいて学習しているので、馬場小は製品が仕上がるこまかい作業工程を克明に追うことで、製品が仕上がるすばらしさを再認識していったのではないだろうかと考えられる。これはまた、馬場小では遅れているといった感情が薄らいていることから裏付けられる。

ロ 九谷焼

事前と事後の感情の増幅が非常に乏しい。その要因として考えられることは、近代産業を学

図2 輪島塗に対する事前と事後の感情の比較(馬場小学校)

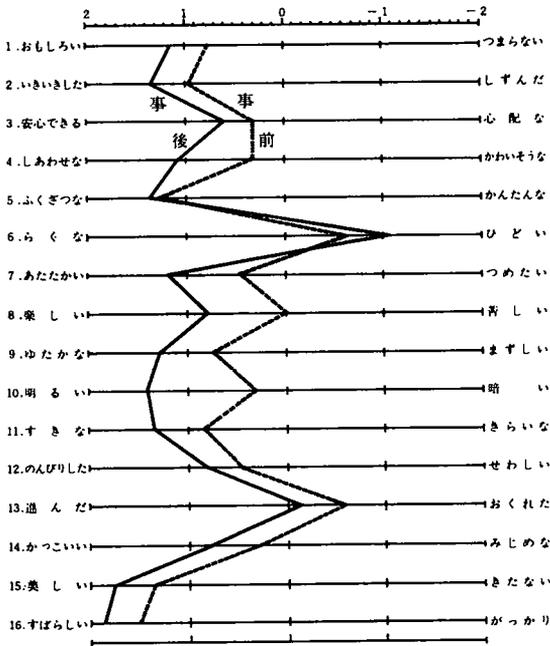


図4 輪島塗に対する事前と事後の感情の比較(付属小学校)

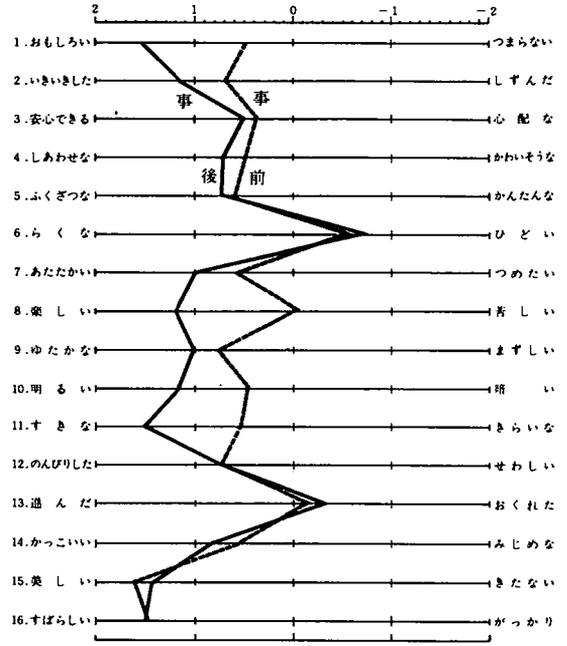


図3 九谷焼に対する事前と事後の感情の比較(野町小学校)

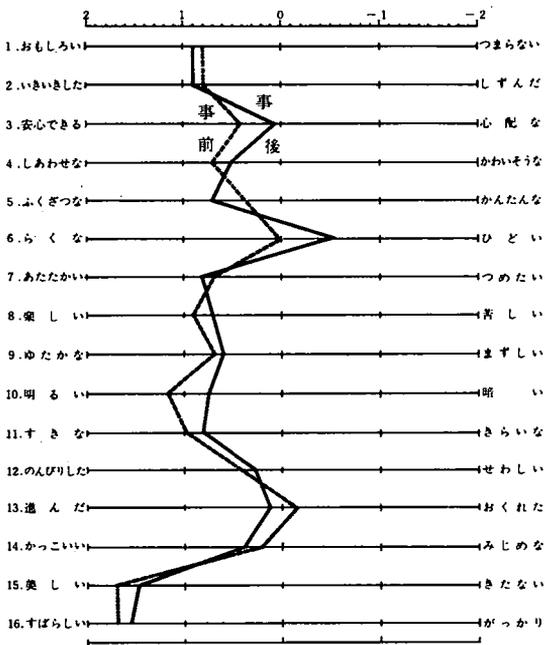


図5 輪島塗、九谷焼に対する事前の感情

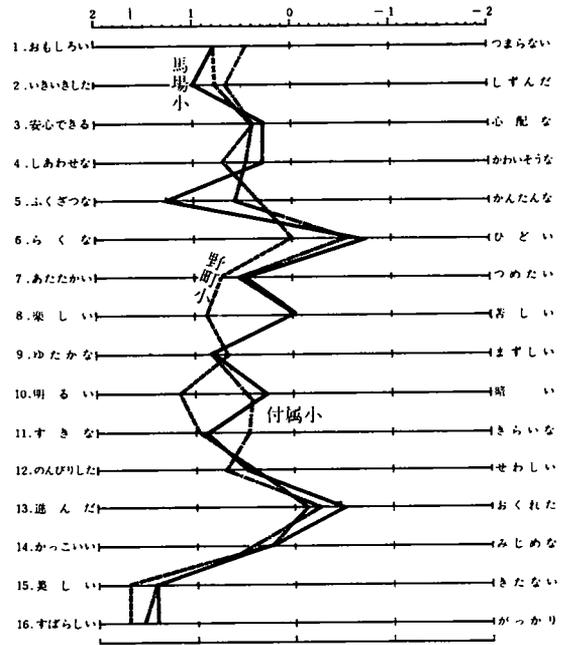
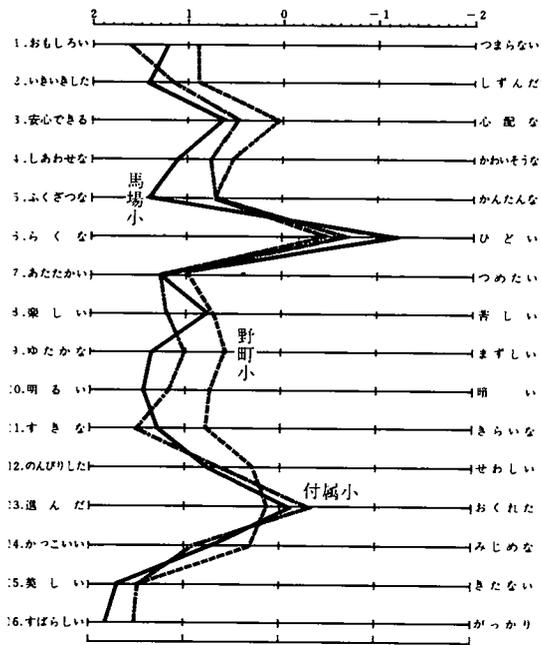


図6 輪島塗、九谷焼に対する事後の感情



習した後、その比較を通して九谷焼の価値を追究したため、二者択一的な価値の意識が強く、事前に抱いていた九谷焼の製品の価値が再認識されなかったといえる。そのため、興味・関心もあまりわかなかつたとみられる。

(4) 考 察

評価結果を総合的にみると、両素材に共通して言えることがいくつか浮かび上がってきた。反面、各素材のもつ長短も現われてきた。先ずこれらを考察し、ついで、問題の所在を考えてみたい。

先ず、知識・理解面では、どちらの素材の場合も、児童は事前にいくつかの要素概念を把握しており、学習の経過とともに把握される要素概念が拡大し、関連的に把握されていくことが明らかになった。しかし、実施前から重視していた気候・風土との関連に対する切り込みが弱いという結果が出た。各指導者がこの面にそれぞれ努力したにもかかわらず、こうした評価結果が出たことは、気候や風土が5年生の児童に

いかにつかませにくいかを物語っていると考えられる。情意面では、どちらの素材をとっても（感情が肯定から否定へと変化するのではなく）事前に肯定的な反応を示し、それが学習によって増幅されるということも明らかになった。

能力・態度面及び情意面では輪島塗の方が優れた素材であるという評価結果が出た。児童が学習に立ち向かった時、歴史・生産工程・生産高など、次々と疑問が誘発されるのは輪島塗であり、学習が終わって、その産業の将来を展望させても（肯定するか否定するかは別問題として）学習した知識と関連づけて客観的に展望するのも輪島塗であった。しかも、情意面では、輪島塗の方があきらかに感情の増幅が大きかった。

一方、九谷焼を素材とした場合、児童の目は製品の美しさから、それを造る職人の気持ちにといった人間の内的心情面に向けられ、伝統工業「九谷焼」を取りまく諸条件を客観的に把握しようとする姿勢が希薄であった。しかも、そうした人間の心情が学習の中核にすえられているにもかかわらず、学習による感情の増幅が小さいという好ましくない結果に終わった。九谷焼を取りまく諸条件を少々軽くしても、そこに働く人間の内的心情に迫ろうとしたのが指導者の意図であった。しかし、見学可能な工場は、観光施設となっており、児童の心情をゆさぶるには到らなかったと判断する。

「働く人の内的心情に興味に向いた」野町小の実践と、「働く人をとりまく環境や諸条件に目に向いた」馬場小・付属小の実践とを、角度を変えて考えてみたい。それは、見学を用いたか資料を用いたかのちがいでないだろうか。見学や映像メディアは、そこに生きて働く人間への共感や感動を呼び起こし、活字や統計資料は、人間をとりまく諸条件をつかみとるのに適しているということは、我々が日頃の実践で常々感じているところである。馬場小と付属小とを比較した場合も、実物を教室へ持ち込んだ付属小では興味・関心が大きく、参考資料を用いた馬場小では製品の価値を見つけることに成功

している。これらを総合して考えると、3校の実践の長短は、素材のちがいがというより、手法のちがいに起因することも大きい。しかし、14頁でも述べてあるように、九谷焼が機械化による手工業と全くの手工業による生産という二面性を持ち、伝統工業の特質を的確にとらえにくい素材だということもうなずけるのである。

今、評価を終えて疑問として残ったことは、3校で出てきた差異が、素材のちがいなのか手法のちがいなのかということである。知識・理解面、態度・能力面、情意面共に、事前調査に見られる差異について、「既習経験の違いなのか、地域性なのか、素材にあるのか」を決めかねている部分が多い。また、事後調査でも、手法の違いによって生じたのか、素材による違いなのかを決めかねている場合がいくつかある。また、素材に起因すると言いきった場合でも、研究者間で意見が分かれたこともあった。こうした点をふり返ってみると、この評価手法は新しい試みであったが、カリキュラムを評価するのに充分とは言いきれない面を残している。

だが、そこをあえて結論づけてみたい。知識・理解面では、九谷焼が製品の美しさや存在の条件、原料との結びつきをつかませるのに適し、輪島塗は技術、技術保存、行商といった要素概念をつかませるのに適している。しかし、これは、一長一短であり、知識・理解面に関する限り、両教材には優劣が見られない。しかし、態度・能力、情意といった面では、輪島塗の方が優っているように思われる。ただし、本年は移行期であり、野町小、馬場小、付属小で、それぞれに近代工業と伝統工業の単元の位置づけに差異があり、こう言い切ることに、ためらいを感じている面もある。

4 まとめと今後の課題

私たちは昨年度の報告(その1)で述べたように社会科授業評価において「その単元を終えた後、期待通りの概念が児童にどのように形式されたか」を重視しようと考えてこの研究を進

めてきた。ゴールとしての単元の最終目標が一つであっても、その展開の仕方は、児童の居住地の実態、既有的認識内容やその程度、資料としての素材などによってさまざまなバリエーションが考えられることを指摘してきた。

今までに単元のとらえ方やその位置づけ、素材として地域の伝統産業の中から、九谷焼・輪島塗を取り上げることにし、共同研究としての土俵を同一にした。

すなわち

第1次基本案

- ① 全国各地にある伝統工業のさかんな地域の中で、九谷焼・輪島塗の2つのものを取り上げる位置づけをはっきりさせる。
- ② 両者の製品はどんなものか、実物に触れて美しさに感心させる。
- ③ どのような条件の中で育てられてきたか、その背景を地理的・歴史的面から調べさせる。
- ④ 技術の保存や育成がどのようにすすんでいるのか、現状と将来の見通しについて調べる。

この案は、2つの素材を同じ時数、同じ比重で、ほぼ同じ学習展開をしようとするものである。この展開案のメリットとしては、素材に対する認知の広まりや学習パターンの定着が予想されるものの、児童の学習意識の高まりや感動を呼びおこすには、平板になると考えられた。

そこで子どもにもっと興味・関心をもたせ、問題意識を高めさせて主体的に取組ませる展開案を検討した。その結果、的をしばり、学習にアクセントをつけるものとして、A型(九谷焼中心) B型(輪島塗中心)の2案で比較研究することにした。

A型(九谷焼中心)授業

- ① 基本案に同じ。
- ② 九谷焼の値うちについて工場見学や資料を活用して働く人・工程・歴史を調べて、近代工業と比較する。
- ③ 九谷焼の問題点や今後の展望を考える。

九谷焼に対する子どもの認識は、高価な焼物

であり、かつ伝統的につくられているものとして、調べたいことの多くは、この焼物をつくる工程とその職人の気持ちについて関心が高い。

このような子どもの実態に立つ時、実物を直接見たり、工場見学を過程の中に入れるのが妥当な案といえる。幸い、九谷焼については、身近かに見学の機会が得られるので、それに対応した実践となった。

見学を効果的にするための事前の学習や事中の指導について充分実施されることは当然であるが、見学の成果は充分あらわれている。

すなわち、九谷焼の美しさ、工程の巧みさ、働く職人のようすとその気持ちなど動的なものとしての認識の増幅が顕著である。ろくろ回し、絵付けの仕事の動作を見、手づくりで仕上げられていく工程の巧みさに共感する児童も多くいる。それは働く人間の姿を見、感じたのである。これは、作業場でしか体験できない学習効果である。社会科学学習における現場学習の大切さを教えるものであろう。

しかし、授業者の指摘にもあるように九谷焼に対する値うちをさぐること重点をおいた展開であったので、地理的・歴史的背景などに着目した追究が弱かったようである。しかし、九谷焼の生産地がかなり広範囲にわたっていること、見学に重点をおいた学習であることを考えればやむを得ない。

ところで新学習指導要領の趣旨から見つめると地理的環境の理解と人間の生活・生産との関係を把握する学習が期待されているので、その趣旨を生かすための典型的素材としての適否は検討されてもいいのでないだろうか。

—B型（輪島塗中心）—

- ① 基本案と同じ。
- ② 輪島塗の種類・生産工程・その歴史について調べる。
- ③ 輪島塗の立地条件・存続条件と今後の問題点を調べる。

②の学習過程で問題づくりをした事項について一人調べする時間を設定し、図書資料を中心にかなり深く調べることができた。いろいろな角度から調べた事項を関連づけて傾向性をまとめてつかもうとしたり、立地条件を考察しようとするものが、知識評価で多く見られることである。これは、思考力を高める態度・能力育成という観点でバリエーションを考える大切な要素としたいものである。

児童の感想の中に「作っているところを見て勉強してみたかったです」とあるように、間接資料でくわしく調べれば調べるほど、直接見学して、美しい塗物がどのような仕事の仕方のできるのか見たくなる心理が働くであろう。楽しさ、苦しさについても直接見聞したいのは真理であろう。特に情意的なものは、肌で感じることが大切でなかろうか。でも、こうした機会はきわめて少ないのが現実なので、複数の資料でその傾向をさぐり、真実の姿を把握して行く力も要求されるので、この点も大切にしなければならぬ。

以上、基本案、A型案、B型案について若干の考察を加えてきたが、どの案が最良かを定めることは困難である。授業は、細部にわたる諸要素から成立するものであるから、むしろその中で特にポイントになるものを決めることが大切であろう。

A型案は、見学にポイントを求めたので事実認知の拡大深化、情意面の多様化、個性化が見受けられた。

B型案は、調べる学習にポイントを求めたので事実認知が細部にわたり、しかもノートの活用によって相互の關係に着目して關係把握にまで高まった認識の仕方をするものが多くいた。また、〇〇を調べたい、××を解きたいという前向きな態度を示すものが多くなっている。

以上のまとめの中から今後の課題をさぐってみよう。

① 素材について

この單元では、九谷焼、輪島塗の2つの素材

で展開するように計画したが、素材そのものについての適否はない。しかし、新学習指導要領でねらうもの、子どもの居住地、教材化できる質的量的な資料収集の可能性などから、素材の適否を見直してみると、調査の中でも明白になっていたように地理的風土に着目するものが少なかったため、この面からの追究をさせるには輪島塗の方がよいのではないと思われる。それは、輪島という比較的狭い範囲に限定して生産地が集中していること、気候・地形という地理的環境との結びつきが強いことが子どもに把握し易い点である。

② 単元構成について

到達させたい目標の中には、伝統工業の学習内容を通して単なる産業学習でなく、国土の理解という大きな目標を伏線としてもっている。

その意味では、2つの素材を取上げることは理解を広めることに対して大きな役割をもつ。しかし、同類の素材を同じ比重で、しかも並列的に学習させることは、若干の広まりは期待できても、学習意欲という面からみると、必ずしも適切な構成とは言えない。そこで子どもの主体的な学習意欲を促進するために、一方で基礎的な内容、学習方法について指導するならば、それを発展的にするために既習の学習内容・方法を活用して深化・拡大をはかる構成が考えられる。

③ カリキュラム評価について

私たちは、カリキュラム評価のより適切なあり方を求めて、理解面、情意面、態度面からアプローチしようとした。そして理解面では、より多くの深化・拡大を、情意面では、より多様性のあるゆきぶりを、態度面では、より積極的な学習態度を、それぞれねらって調査した。

しかし、この実践の中では、その道は遠かった。多様なバリエーションの作成とその吟味が充分に行われたといえない上に、その授業実践がきわめて少ないので、一つの傾向性をつかみ出すには困難であった。ただ、研究過程の中でも指摘されているように、これらのデータ結果

がはたして素材によるものか、手法によるものか議論の分れる所であった。学級の実態、授業展開における小さな指導の配慮の問題、など特に子どもの実態とのかかわりが大きいだけに、一様に傾向をつかんで一般化することは、早計にはできない問題である。したがって、カリキュラム評価の必要性は、相互に認めながらも、その適切な評価が可能なかどうか、大いに問題の残る点である。

このように考えてみると、カリキュラム構成のポイントとして、子どもの実態に基づく学習展開、学習活動を単元の中にどのように位置づけるか、そして学習活動が単なる認知・情意の増幅でなく、ゆきぶりをかけ、思考の転換・深化を求め、そのことが学習意欲ある態度にまで高まって行く姿が期待できるように構成すべきであろう。こうしたことがマイクロなスケールでなく、単元サイクル、単元サイズの中で明確に位置づけられているカリキュラム構成を考えて行くべきであろうという、今後の方向性については指針を得たようである。

私たちの取組んだテーマは、まだまだ未知なるものが多く、今後の課題として大いに研究すべきであると確認し合ったのである。

(注)

- (1) 矢ヶ崎孝雄・社会科教育研究グループ
日本の工業における「伝統工業」のカリキュラム構成と評価(その1) 金沢大学教育学部教育工学研究 第4号 昭和53年
- (2) 海後宗臣監修『社会指導の研究とその実践』
葵書房P 403 昭和48年
- (3) 水越敏行編著『授業の設計と評価の技術』
明治図書 昭和51年
- (4) 評価問題作成にあたっては次の文献を参考にした。
古銭良一郎・半田博著『小学校社会科・地域社会学習の新構想』中教出版 昭和53年
- (5) データ処理に関しては、次の文献を参考にした。
坂元 昂・水越敏行編『授業設計の新技術』
明治図書 昭和52年